

ア라운드

GOGO

55

飲み会が苦手

別府 哲



ここ1、2年、このコーナー（ア라운드55）を書いた人から、「そろそろ（依頼が）来るよ」と言われた。覚悟していたが、少し気が重い。

私は、近況とか、好きなことを自由に：と言われるのが苦手である。学生時代から、飲み会などで、自分の意見のある時は滔々（とうとう）と、ある時は当意即妙に言える人を見て、いつも「すごい！」と思っていて。私はそういう場で何を言っているかわからず、黙ってしまうときが多かった。自分には「語るべき人生がない」ように感じ、苦しかった。大学院の一年先輩に「飲み会が苦痛」と言ったら、「何それ!!」と一笑にふされた。今でも、そういうことは苦手だ。職場での飲み会でも

「二言」と言われると、できるならだれかに変わってほしいと思う。しかし立场上仕方なく、その役回りを演じる機会が増えた。断ると私に頼んだ人に迷惑がかかる。そう考えることで、ある程度役割を演じられるようになったのかもしれない。

*

「類は友を呼ぶ」ではないが、ゼミには私と似ている学生は多い。一方、研究会で自分の意見をしっかりと伝える、「私に似ていない」（？）学生もいる。その一人はこう言った。「だって、せっかく参加したのだから少しでも爪痕を残したい」。まさに「すごい！」である。ただ、「私に似ている」と思う教え子に学ばされることもある。

大学に赴任し最初に出会う

た学生である、辻あゆみさんもその一人（と勝手に思っている）である。研究者として活躍されている彼女と最近、共同研究する機会ができたので、「みんなのねがい」をひろめてほしいと頼んだ。そして毎月のように増やしていただけ、あれよあれよという間に、（4月と比べ）26冊購読数が増えることとなった。そういう人だからこそつくれる、人とのつながりがあることをあらためて教えてもらった気がして、嬉しく感じている。ただ一つ困るのは、毎月のように購読数が増えるため、今月は辻さんに何冊送るのがいつも思い出せず、妻から「何それ!」と言われることである。

（全障研岐阜支部、大学教員）